

印欧語における動植物の名称の起源に関する一考察

森 田 信 也

0. はじめに
1. オノマトペ起源
2. 擬態語起源
3. 「色彩」に由来する語彙
4. 印欧語の色彩感覚
5. その他の色
6. ブナ科の樹木
7. おわりに

On the Etymological Origin of Animals and Plants in Indo-European

Shinya MORITA

We examine the etymological origins of animals and plants in Indo-European. The way of naming is mainly categorized into the following three.

First, *swine* and *cow* are named in an onomatopoeic way. They are based on the way they cry. **Sū-* derives etymologically from ‘maker of the sound /su/. **G^wou-* goes back to Sumerian *gu-*, which means a neighing sound.

Second, *gorse* and *urchin* are named in a mimetic way. They derive from the Indo-European roots which have the connotation of bristles. In Italic languages, *rāna* in Latin and *grenouille* in French are onomatopoeic, while in Germanic languages, *frog* is named in the mimetic way for leaping.

Third, some animals and plants derive from the Indo-European roots meaning color. **Bher-* meaning ‘brown’ develops into *bear* in English. In addition, **el-* meaning ‘red, yellow, and brown’ develops into *alder*, *elder*, and *elm* in plants and *elk* in animals. *Birch* in English is so named because its bark is white. Furthermore, *ruby* and *rust* are so named because they are red. **Reudh-* develops into *robur* ‘oak’ in Latin,

because of its color, and *robust* in English derives from the same origin and is so named because red oaks are extremely tough and hard. *Dove* in English goes back to the origin of its color etymologically; on the other hand *pigeon*, which goes back to *pīpīre* ‘to peep’ in Latin, is onomatopoeic.

0. はじめに

オノマトペには世界共通の感覚のようなものが存在する。例えば、カエルの「ゲロゲロ」はフランス語の *grenouille*に通じるものがあり、「ケロケロ」は英語の *croak*に通じるものがある。また、色彩も言語に関係なく共通の視覚的な感覚の一つである。日本語では「白鳥」は文字通り白いからそう呼ぶのであるが、印欧語の世界でも色彩を示す語根から、同じような命名方法により、実に様々な動植物を表す語彙が派生している。そこで、本稿では語源という視点から様々な動植物を指す語彙を分析し、印欧語の世界に共通する感覚を探り、さらに語族の枠を越えて人類に共通の音表象や感覚について考えてみることにする。

1. オノマトペ起源

1.1 印欧語根 *sū-

日本語では豚の鳴き声は「ブーブー」と表現されるが、古代の印欧語世界の人たちの耳には、「スースー」あるいは「シューシュー」と聞こえていたようである。現代英語の *sow* は雌豚を意味するが、これはラテン語の *sūs* やギリシャ語の *βύς*、さらには印欧祖語 *sū-までさかのぼることができる古い語である。サンスクリット語の *sū-karāh は『『スー』という音を発するもの』という意味で、これは擬音語がその起源であることを裏付けるものである。

Sanskrit *sūkarāh*, ‘wild boar, swine’ Avestic *hū* ‘wild boar’

Latin *sūs* > *suinus* ‘pertaining to swine’: Oslav. *svinija* ‘swine’

All these words derive from the IE imitative base *sū- which is proved by the Sanskrit equivalent *sū-karāh* lit. ‘maker (-utterer) of the sound *sū*’¹

特にギリシャ語 *βύς* や古代ペルシャ語 *hū* には /h/ 音が現れており、「ヒューヒュー」>「スースー」あるいは「シューシュー」という擬音語が感じられる。

1.2 古代の「馬の鳴き声」

同根のラテン語 *bōs* やギリシャ語 *βov̄ς* は牛の総称で雌雄どちらも指していたのに対して、ゲルマン語では牝牛に意味が特化された。サンスクリット語 *gauḥ* やアヴェスタ語 *gāush* では印欧祖語と同様に、'ox, bull, cow' を意味していた。印欧祖語から派生したこれらの印欧語族の同根語は、さらに突き詰めるとシュメール語の *gu* (古くは *gud*) 'ox, bull' までさかのぼることができ、これは擬音語が起源の言葉であった²。

現代英語の馬の鳴き声は *neigh* という語彙で表されるが、これは古英語の *hnāgan* にさかのぼる。語頭の [h] があると擬音語であることが一層明白に感じられるが、ラテン語にも *hinniō* という語彙が存在し、ギリシャ語 *ἄιννος, ἴννος* 「ラバ」からの借用語で、語源不明のオノマトペである。また古英語の *hnāgan* は古くは *xnāg-*であったはずで、シュメール語の語頭の /g/ とゲルマン語の /x/ は調音点の差こそあれ共に軟口蓋音で、共有の音表象を持っているといえよう。

1.3 /gr-/ の音表象

Cochon の語源は、Bloch (1989:139) では、

Cochon signifie surtout << jeune porc >> jusqu'au XVIIe siècle. Probablement formé d'après les cris qui servent à appeler les porcs (koš koš). ---- On propose aussi d'y voir un dérivé de *coche* << entaille >>, les truies et les verrats châtrés étant souvent marqués d'une entaille à l'oreille.

とあり、子豚の「鳴き声」から生じたオノマトペによる造語という見解に加え、雌豚と去勢した雄豚は耳に傷 '*coche*' を付けて印をつけたことから来るという見解も示されている。

また、*Goret* という語の語源は、Bloch (1989:299) では、

'dérivé de l'ancien français *gore* << truie >>, mot d'origine onomatopéique, imitant le grognement du porc, et qui existe aussi dans d'autres langues. Cf. allemand *gorren* << grogner >>.'

ということから、豚の鳴き声をまねたオノマトペが語源であることが分かる。

Pokorny (1989) でも、**gru-* 'Grunzlaut der Schweine' とあり、印欧祖語において既に豚の鳴き声を示すオノマトペが存在していた。この語根からは、ギリシャ語 *γρῦ*, ラテン語 *grundio* > *grunniō*, 現代フランス語 *grogner*, 古英語 *grun(n)ian*, 現代ドイツ語 *grunzen*, さらに「子豚」を意

味するギリシャ語 *γρόλος*, *γρούλλος* も同根から派生している。

Ernout et Meillet (1985:284) では、*grundiō* > *grunniō* は、‘L’un des mots en *gr-* indiquant des bruits.’ とあり、*gr-* で始まるラテン語にはオノマトベ起源のものがいくつか存在すると記述されている。

Garriō: babiller, bavaeder.

Il ne semble pas que le verbe s’applique au cri d’un animal déterminé. Ce n’est qu’à une époque relativement tardive qu’il s’emploie en parlant d’animaux, du reste divers: *chien*, *grenouille*, *oiseaux*. Dans la langue archaïque, *garriō* n’a que le sens de << barvader >>; *garrulus* se dit de toute espèce d’êtres ou de choses.

Verbe expressif (comme *garriō*) et comme *gingriō*, *grundiō*. Il y a une série de mots comprenant *g* et *r* qui désignent des bruits, ainsi en latin des noms d’animaux comme *grūs* et *graculus*, le verbe *grundiō*, etc³.

ラテン語の *garriō* は特定の生き物の鳴き声を示すのではなく、犬やカエルや鳥などの様々な動物の鳴き声を表すのに用いられたが、それは時代が下ってのことであった。

元来、フランス語のカエルを意味する *grenouille* の起源はラテン語では *rāna* という語であった。

Altération d’un plus ancien *re(i)no(u)ille*, lat. pop. **rānucula*, d’où aussi it. *ranocchia*, avec un *g* dû probablement à l’influence de quelques mots imitant le cri de certains animaux, comme *gracula* << choucas >> (d’où le fr. *graille*); cette forme doit son succès à sa valeur plus expressive, cf. de même a. pr. *granolha*, antérieur d’environ cinquante ans à *grenouille*⁴.

俗ラテン語までは /r/ で始まる言葉であったが、その他のオノマトベ起源の動物の鳴き声を思わせる語彙に影響されて、語頭に /g/ 音が付加された。こうした音表象は世界共通で、日本語「ケロケロ」や「ゲロゲロ」、英語の *croak* にも通じるものがある。こうして本来の語の語頭に /g/ 音を加えて誕生した語彙はその音声的な効果と音表象の相乗効果で1215年頃に用いられるようになった。ロマンス語ではラテン語の形をよく保っているイタリア語の *rana* やスペイン語の *rana* と比較してみても、フランス語の場合が、かなりの突然変異であることが分かる。

この *grenouille* の他に、ラテン語の *rāna* の語形を保っている古フランス語の *raine* からの *rainette* も併存するが、*grenouille* の方がより一般的な語彙である。

ラテン語の *rāna* に関しては、Varrō (L.L.V-78) では、*rāna ab suā dicta vōce* 「カエルはその鳴き声ゆえにそう呼ばれる」とあり、ラテン語のネイティブ・スピーカーであったワルロの直感からも、

ラテン語の *rāna* そのものがオノマトペによるものであることは間違いない。

1.4 /kr-/ の音表象

現代英語のカエルの鳴き声は *croak* という語彙で表されるが、/kr/ で始まるこの語も言うまでもなくオノマトペ起源である。印欧語根 **ker-* ‘an echoic root indicating loud noises or birds’ は、ラテン語の *crepō* ‘to rattle’ や *crōciō* ‘to cry/croak as a raven’ そして *crociō* ‘to croak loudly’ などが派生している。本来的にこの **ker-* という語根は ‘imitativeness for hoarse and rough sounds or cries of animals’ を表すもので⁵、そこからラテン語の *corvus* ‘raven’ や *cornix* ‘croak’ も派生している。

**ker-* の他に、印欧語根 **gar-* ‘to shout’ もラテン語 *garriō* ‘to chatter’ へ、また **ger-* もラテン語 *grūs* ‘crane’ へと発展する。グリムの法則から印欧語の /gr-/ はゲルマン語の /kr-/ に対応するので、ラテン語の *grūs* が古英語の *cran* に対応するわけである。同様に、印欧語の /kr-/ はゲルマン語の /hk-/ に対応し、ラテン語の *corvus* は、ゲルマン語の **hrabnaz* > OE *hræfn* > ModE *raven* という対応関係になる。

現代英語の *croak* は、ラテン語の *crōciō* に対応し、古英語の *cræccettan* にさかのぼるが、グリムの法則から外れている。これは、オノマトペによる「音」そのものが保存され、オノマトペであることが強く意識的に認識されていることから来るものと考えられる。他にも、*crow* や *creak* なども同様にグリムの法則から外れているが、これは、/kr/ という誰の耳にも明らかなオノマトペによる「鳴き声」そのものであることが最大の理由であろう。

一方、鳥の名称はゴート語の *hrukjan* や古英語の *hræfn* にはグリムの法則がかかっている。理論的には、現代英語の *crow* は **gar-* と語源的には関係しているが、ラテン語の *crōciō*, *cornix*, *corvus* ともどこかでつながっているように思えるのである。

1.5 ラテン語の鳥の名称

--- dē hīs pleraeque ab suīs vōcibus ut haec:
upupa, cucūlus, corvus, hirundō, ulula, bībō;

--- of these, very many are named from their cries,
as are these: upupa ‘poopoe’, cucūlus ‘cuckoo’,
corvus ‘raven’, hirundō ‘swallow’, ulula

'screech-owl', būbō 'horned owl'; ---

(Varrō 'Dē linguā latinā' 5:75)⁶

鳥の中にはその鳴き声のオノマトベによって名付けられているものがある。例えば、カッコウはラテン語では *cucūlus* で、その鳴き声は *cucūlō* と鳴く。フクロウは *cūcubō* と鳴き、カラスは *cūcūrō* と鳴く。

ラテン語の *cācabō* はヤマウズラの鳴き声を示すが、現代英語では *cackle* がこれにあたる。語構成の特徴を分析的に眺めてみると、ラテン語は reduplication により鳥の鳴き声のオノマトベのニュアンスを出しているのに対し、現代英語の方は反復を表す接尾辞を伴っている。

印欧語根 **gal-* 'to shout/call' からラテン語の *gallus* 「おんどり」が生ずるが、元々はその語根の意味通り 'calling bird' の意味であった。この語は *Gallus* や *Gallic* という語彙と関係があり、実際に古代ガリアでは図像学上、おんどりが重要なシンボルであったことが考古学的にも検証されている。

音表象として、当時/gl/という音を伴う語彙が、視覚的、聴覚的、そして意味という3つのパラメーターを持っていて、それぞれの要素が相互に強く結びついて一つの意味を形成していたように思われるのであるが、たとえば、英語で *gaggle* という語が初めて登場するのは1350年頃とされており、それ以前にはさかのぼれないが、印欧語根の **gal-* と同じ意味で英語という言語に形を借りて現れたように見える。ラテン語の *crōciō* は現代英語の *croak* に相当するが、明らかにこれはグリムの音韻法則から外れている。しかし、オノマトベに関しては洋の東西を問わず、また時代を問わず、人間の本能的な感覚というレベルで共通する部分が非常に大きいため、また普遍的であるがゆえに、こうした現象が起こっても全く不思議なことではない。

1.6 その他の鳥など

1.6.1 おんどり

現代英語の *cock* 「おんどり」はその鳴き声から名付けられ、古代教会スラブ語の *kokotū* もサンスクリット語の *kuk-kuṭāḥ* もおんどりの鳴き声を表す reduplication が見られ、オノマトベであることは明白である。

現代英語の *chicken* も、印欧語根 **kjuk-* 'imitative of the sound characteristic of a chicken' から派生し、古英語の *cicen* を経て現代英語の *chicken* になるが、これも鳥の鳴き声をまねた擬音語である。

Pigeon 「ハト」は、ラテン語の *pīpīre* 'to peep, chirp' から派生した語で、後期ラテン語の

pīpiōnem (*pīpiō* の対格) が古フランス語 *pījon* を経て現代フランス語の *pigeon* が現代英語に入ってきたものである。色彩の語で後述するが、同じ「ハト」を意味する語彙 *dove* は、その羽(体)の色彩から名付けられており、好対照をなしている。

1.6.2 めんどり

ドイツ語は *Hahn* とその女性形 *Henne* で同根だが、英語はラテン語起源の *cock* と *hen*, フランス語は *coq* と *poule* (〈 L. *pullus* << petit d'un animal; spécialement << poulet >>) で別語根である。

現代英語の *hen* 「めんどり」は、印欧語根 **kan-* 'to sing' に由来し、「歌う鳥」が語源である。ラテン語の *canere* 'to sing' や現代ドイツ語の *Hahn* 'cock' と *Henne* 'hen' も同根である。古英語でも現代ドイツ語同様、*hana* 'cock' と *henn* 'hen' は同根で、男性形と女性形の対立になっている。さらに、ギリシャ語の *ἦι-καυος* 'cock' も 'singer of the dawn' 「暁の歌唄い」という意味で **kan-* の派生語である。

1.6.3 ガチョウ

IE **ghans-* 'goose'; L *ānser* < **hanser*; Skr *hamsá-* 'goose, swan'; Gr *γῆν*; OE *gōs*; ModG *Gans*; Gr *χασκω* 'to yawn, gape'⁷⁾

「白鳥」の語源の個所で後述するが、現代英語の *swan* は、印欧語根 **swen-* 'to sound' が語源で、古英語 *swān* > ModE *swan* という発展をしてきた。これは、ラテン語の *sonāre* 'to sound' と同根で鳴き声による命名である。また、ギリシャ語の *κυκνος* はラテン語の *cycnus* を経て現代フランス語の *cygne* に対応し、元々は擬音語起源である。これらから考えて、サンスクリット語の *hamsá-* が 'goose, swan' の意味であることから、「がちょう」も擬音語の可能性もある。くちばしをあけてガーガー鳴く習性から名付けられたという説も全くの民間語源であるとは限らない。

1.6.4 犬

現代英語の *hound* は、印欧語根 **kwon-* 'dog' にさかのぼることができ、ラテン語の *canis* は同根で、古英語の *hund* 'dog' を経て *hound* に至る。ラテン語の /kanis/ と日本語の漢字「犬」/ken/ には犬の鳴き声である「キャンキャン」という共通のオノマトペが見られ、これらの例からも語族の枠を越えた人類に共通の感覚という言葉の括りが存在しているように感じられる。

2. 擬態語起源

2.1 「トゲトゲ」という感覚

ギリシャ語 $\acute{\upsilon}\acute{\alpha}\iota\nu\alpha$ からは、「ハイエナ」という語も派生している。

Avec le suffixe féminin dépréciatif $-aiva$, $\acute{\upsilon}\acute{\alpha}\iota\nu\alpha$ << hyène >>; elle ressemble au porc par son allure, sa crinière hérissée; le cas diffère de celui de $\lambda\acute{\epsilon}\alpha\iota\nu\alpha$ qui est le féminin de $\lambda\acute{\epsilon}\omega\nu$ ⁸.

女性形を示す接尾辞 $-aiva$ は、単純に $\lambda\acute{\epsilon}\omega\nu$ の女性形 $\lambda\acute{\epsilon}\alpha\iota\nu\alpha$ を作る機能を持つほかに、しばしば意味の卑下を伴う場合があり、ギリシャ語では「ハイエナ」は「剛毛のタテガミを持つブタ」という語源である。

L. *hyaena* < Greek $\acute{\upsilon}\acute{\alpha}\iota\nu\alpha$ ‘hyena’ lit. ‘sow’ formed with feminine suffix $-aiva$ < Greek $\acute{\upsilon}\acute{\sigma}$ ‘swine’ The hyena was so called in allusion to its bristly mane. For sense development, compare Hungarian *sertés* ‘hog, swine’ lit. ‘the bristly animal’ from *serte*, *sörte* ‘bristle’⁹.

ラテン語の *hyaena* はギリシャ語から来た語であるが、意味の点では、ハンガリー語の *sertés* 「豚」と *serte*, *sörte* 「剛毛」の関係に通じるものがある。

ハイエナがそう名付けられた理由は、豚と外見が似ていたというほかに、多産でががつつしていたなどの性質も pejorative なニュアンスと無関係ではないと思われる。

Poser **ghor-yo-* permet plusieurs rapprochements, notamment de noms d’animaux à poil dur et hérissé, et fait finalement remonter à la racine de lat. *horreō*, skr. *hṛṣyati*, *hárṣate*¹⁰.

**ghers-* ‘bristle’

1. zero-grade: a) Germanic **gorst* > OE *gorst* ‘gorse’; b) *hordeum* ‘barley’
2. lengthened-grade: Latin *hēr/ēr* ‘hedgehog’
3. lengthened-grade: Latin *ērūca* ‘caterpillar’
4. full-grade: Latin *hirsūtus* ‘bristly, shaggy, hairy’
5. suffixed full-grade: Latin *hispidus* ‘bristly, shaggy, prickly’

6. o-grade: Latin *horreō* ‘bristle, be terrified’¹¹⁾

印欧祖語の *ghers- からは、現代英語の *gorse* 「ハリエニシダ」や *urchin* 「ヤマアラシ」なども派生しており、さらに *horror* 「恐怖」も同根である。特に、*urchin* は「ヤマアラシ」の他に「ハリネズミ (米)」や「ウニ」といった意味もあり、印欧語根の *ghers- ‘bristle’ の意味が非常によく反映されている。*Urchin* の語源に関しては、本来的に古いラテン語の *hēr* は ‘pricky creature’ の意であったが、(*h)ēr* ‘hedgehog’ の意味になり、古フランス語 *heriçon* を経て、現代フランス語の *hérisson* や現代英語の *urchin* へと発展をとげている。

さらに、ギリシャ語の *χῆρ* は ‘hedgehog’, アラビア語の *der* は ‘wild boar, hog’, その指小形 *derk, dirk* は ‘young pig, sow’, アルメニア語の *jar* は ‘mane of horse’ などの語彙も全て同根である。

純粋な印欧語起源ではないが、現代英語の *rose* 「バラ」は印欧語の **wrdho-* ‘thorn, bramble’ までさかのぼることができ、「トゲ」が語源になっている¹²⁾。

このようにトゲや剛毛が生えた生き物の呼び名に印欧語全般を通して共通の語根が見られるが、古代のヨーロッパ人が初めて目にした「トゲの生えた」生き物の呼び名を、「トゲトゲ」のように最も原始的な方法、つまり擬態語で付けたことは間違いない。そうした生き物のトゲで痛い思いをして、そこから「恐ろしい」「怖い」という観念が生じるのはごく自然の流れであり、ラテン語の *horreō* が同根であっても全く不思議ではないのである。

2.2 英語の *frog*

「カエル」を意味する語彙に関して、ラテン語やロマンス語では、オノマトペを強く意識したものであったのに対して、英語の *frog* の語源は、IE の **preu-* ‘to hop’ さかのぼることができ、サンスクリット語 *právatē* は ‘he leaps up’ という意味で、ゲルマン系諸言語では、OE の *frogga* やドイツ語の *Frosch* など、この「跳びはねる」という意味の語根から「カエル」が派生している。ラテン系諸言語のオノマトペに対して、ゲルマン系諸言語は「びよんびよん」という擬態語による感覚が感じられる。英語の *frolie* 「楽しい」やドイツ語の *Freude* 「喜び」も同根であるが、喜びを全身で表現するとき、「跳びはねる」という行為を連想することは極めて自然である。

3. 「色彩」に由来する語彙

3.1 **el-* ‘red, brown’¹³⁾

1. +k: 「ヘラシカ・オオシカ」 ModE. *elk*; G. *Elch*; L. *alcēs*; Russ. *losŭ*
2. +en/+n: 「アカシカ」 Gr. *ἔλαφος*; Osl. *(j)elenb*
3. **l-on-bho-s*: 「羊」 Goth. *lamb*; ModE. *lamb*
4. **elen-*: L. *hinnuleus* 「子鹿」
5. L. *olor* 「白鳥」; *alcēdō* 「カワセミ」

lamb の語源は、印欧祖語の **el-* ‘red, brown’ にさかのぼることができ、古英語の *lamb* やゴート語の *lamb* も同根である。この **el-* は印欧祖語では色彩の語根で、ここから植物や動物の名前が数多く付けられている。古代ヨーロッパの人たちが民族移動をする中で初めて見聞きする動植物を指して言うときに、その視覚的な色彩に拠り所を求めたのはごく自然のことであり、民族によってその色彩感覚が異なっているという点が非常に興味深い。

3.2 **bher-* ‘bright, brown’ 「褐色の動物」

1. ModE *brown*
2. Reduplicated form *bhibhru-/bhebhru-* ‘the brown animal’ > OE *beofor* > ModE *beaver*
3. Germanic **bero* ‘the brown animal’ > OE *bera* > ModE *bear*
4. Old Norse *björn*
5. Latin *fiber* ‘beaver’¹⁴

**bher-* から n-formative enlargement で派生した *brown* は、広くゲルマン系の言語に見られるが、ロシア語の *bron* ‘white, variegated’ やギリシャ語 *φρῦνος* ‘toad’ と同根である。ラテン語では「熊」は *ursus*、ギリシャ語の *ἄρκτος* も同根であるが、ゲルマン系、バルト系、スラブ系の諸言語においては、熊は神聖な動物であることからタブーとして実名を呼ばず別の名称を用いたので、熊はタブーとして別の表現で置き換えられた。ゲルマン系では、色彩から視覚的に「褐色の動物」と名付けたが、ロシア語は印欧語根 **medhu-* 「蜜」 + **ed-* 「食べる」から *medvyed* 「蜜を食べる者」と表現する。また北欧語では、「熊」を意味する *Björn* は人名に好んで用いられるが、熊の生息地としては一般に寒冷地が多かったことや熊が身近で大切な存在であったことなども影響していると思われる。似たような例に、ラテン語の *aper* があり、

Aper et ses dérivés ont fourni de nombreux noms propres. Le nombre de ces cognomina prouve l’importance du sanglier dans la faune italique, et sans doute l’existence d’anciennes croyances¹⁵.

という記述から、ラテン語では「イノシシ」の派生語で多くの固有名詞が存在することから、「イノシシ」が精神的な面でも大事にされていたことを示すとされている。

インド・ヨーロッパ語族のなかでも語派によってタブー視の有無や動物の呼び名が異なっているのは、とりもなおさず民族性が反映されているからにほかならない。また、「褐色の動物」から、*beaver* や *bear* の他、ギリシャ語では「ひきがえる」派生しているのも民族性を反映するものとして非常に興味深い。

本来、「褐色の」に相当するラテン語は *fuscus* ‘dark’ という語だったが、中世ラテン語の時代にゲルマン系の *brun* が入り、それがロマンス系の諸言語に伝わり、*fuscus* は廃れてしまった。ラテン語の *fuscus* は印欧祖語の **dhuskos* がその起源であるが、ゲルマン系では、ゲルマン祖語 **duskaz* を経て、古英語の *dosc* または *dox* 「暗い、黒い」、さらに現代英語の *dusk* 「薄暮、たそがれ」へ至る。イギリスの Oxford 大学の Christ Church Meadow から Merton College への抜け道の門には ‘Open at dawn, closed at dusk’ という掲示があって、ラテン語 *fuscus* と同根の *dusk* が用いられている。開閉の正確な時間は知る由もないが、「たそがれに閉門」あるいは「薄暮にて閉門」というような美しい言葉には中世以来の学問の府のゆったりとした時の流れが感じられる。

さて、ラテン語の *fuscus* と英語の *dusk* の関係は、一見ラテン語が /f/ で始まり、対して英語は /d/ で始まっているので、同じ語源とは思えないが、例えば、IE の **dhe-/*dho-* は、英語ではグリムの法則で /dh/ の帯気音 /h/ が落ちて /d/ となるので、現代英語では *do* になるわけであるが、一方ラテン語では /dh/ の帯気音の /h/ が脱落せず、一層強まると「ドゥフ」というような音になり第2要素の「フ」の部分が強調されると /ff/ になり、ラテン語の *faciō*、さらにはフランス語の *faire* へと至る。英語の *do* とフランス語の *faire* も実は同源なのである。従って、ラテン語の /f/ がゲルマン語の /d/ に対応するので、*fuscus* と *dusk* の関係も同根なのである。

話しを「褐色の動物」へ戻すと、もともとの印欧語根 **bher-* から直接ラテン語へと進んだのは *fiber* で、同じ語源だが中世になってゲルマン語経由で入ってきたのが *brun* であった。「海狸」を意味するラテン語は、「褐色の」が語源の *fiber* とギリシャ語の借用語 *castor* の2つであったが、*castor* が *fiber* を駆逐してしまった。現代フランス語の「ビーバー」は *castor* がそのままの語形を保って残っている。

3.3 「灰色」の動物

現代英語の *hare* 「野うさぎ」は古英語の *hara* から、さらに IE **kas-* ‘gray’ までさかのぼることができ、ラテン語の *canus* ‘white, gray’ (< **kas-nos*) と *cascus* ‘old’ も同根である。*Cascus* は ‘gray

with age' 「年を取って白髪になった」から「古い」という意味になったが、いずれにしろラテン語では「白っちゃけた」とか「古くて色があせた」というような意味合いを持っていた。一方、ゲルマン系の諸言語では、本来は 'gray animal' という意味で、古英語の *hasu* は「灰色の」という意味であった。これも色彩感覚から来る呼び名である。

3.4 「ハンノキ」と「ニレ」

この **el-* という語根は「赤色」や「茶色」¹⁶あるいは「黄色」¹⁷を意味し、そこからそのような色彩の動物や樹の名前の語源になっている。ドイツ語の *Erle* 「ハンノキ」、ラテン語の *alnus* < **alsnos* 「はんの木」、古英語 *alor* > 現代英語 *alder* 「ハンノキ」、さらにスラブ諸語の派生語も「ハンノキ」の意味である。他にも、古英語の *ellen* > 現代英語 *elder* 「ニワトコ」も同根である。さらに、**el-* + *mo-* で古英語 *elm* > 現代英語 *elm* 「ニレ」、ラテン語の *ulmus* 「ニレ」、ドイツ語 *Ulme* 「ニレ」、バーデン・ヴュルテンベルク州の都市 *Ulm* も同根で、ドイツの都市ウルムもニレの木が群生する都市であったことから、そのように名付けられたとされる。

3.5 **el-* 「動物名」

印欧語根 **el-* + *k-enlargement* という word-formation で「シカ類」を意味する。古英語 *eolh* > 現代英語 *elk*、現代ドイツ語 *Elch*、ラテン語 *alcēs*、ギリシャ語 *ἄλκη* は全て同根で「ヘラジカ」をさす。

また、*n-enlargement* の word-formation では、現代英語の *eland* は「エランド（南アフリカ産の大型のレイヨウ）」のことで、ドイツ語の *Elen* 「ヘラジカ」はリトアニア語 *elnis* から来ており、さらにギリシャ語の *ἐλλός* 「子鹿」や古代教会スラブ語 (*j)elenī* 「大シカ」も同根である。さらに、ラテン語の *alcēdō* 「カワセミ」も同根である。

現代英語の *lamb* の語源に関しては、学者の説が分かれており、一般にゲルマン語以外に同根語が無いとされているが、Klein(1971)¹⁸や Lehmann(1986)¹⁹では同根とされており、**eln-bh-* からギリシャ語の *ἐλαφός* 'Hirsch' が派生している。この word-formation はサンスクリット語の *vṛṣan-* 'bull' に対する *vṛṣa-bha-* やラテン語の *columba* 'dove' < **kel-/kol-* 'of a dark color' + *on-bh-* などと同様で、印欧祖語は **l-on-bho-s* を想定している。これらの word-formation から考察してみると、同根である可能性はかなり高いように思われる。

さらに、*r-enlargement* では、「水鳥の類」を指す語が派生し、ギリシャ語の *ἐλέα* 'Sumpfvogel' (*ἐλος* 'Sumpf'), ラテン語の *olor* 'swan' や現代英語の *auk* 「ウミスズメ」も同根である。

4. 印欧語の色彩感覚

4.1 ‘to shine’ という意味の語根から派生する色彩

印欧祖語では、「輝く」という意味の語根から色彩を表す語彙が多く派生している。例えば、*gher- ‘shine, glow’, *ghel- ‘to shine’, *bheræg- ‘shine, to be bright, white’, *bhel- ‘to shine, flash, burn’ などで、その音韻的な特徴は *gh-/bh-* + 「歯茎音・流音」というものであるが、輝きの色彩的ニュアンスによって微妙に使い分けられていたようである。音声的には、日本語の「きらきら」や「きらざら」にも通じるものを感じることができる。

4.1.1 *gher- ‘shine, glow’

この語根からは、現代英語の *gray* や *roan*, ラテン語の *ravus* など「灰色」を意味する語彙が派生している。さらに古代アイスランド語、スウェーデン語、デンマーク語などの北欧語では、「生後間もない子豚」を意味する語彙が派生している。

語根は全く異なるが、印欧語根の *kas- ‘gray’ はゲルマン祖語では *hazan- で、古英語の *hara*, 現代英語では *hare* となるが、これはラテン語の *canus* < *casnos ‘hoary’ と *cascus* ‘old’ と同根で、原義は「灰色の（動物）」であった。このように、動植物の場合はその色によって名前が付けられるケースがしばしば見られるのは、最も primitive な段階では直接色彩感覚が最も意識されるからに他ならず、感覚的・視覚的という点ではオノマトペによるネーミングに非常に類似している。

4.1.2 *bheræg- ‘shine, to be bright, white’

この語根には「bh- + r」に *g/k* 「軟口蓋音・閉鎖音」という enlargement が加わり、「輝く」という意味に加えて「白い」という要素が内包されている。ただし、「輝く」という観念から二次的に派生する意味合いとして、*/g/* は「白い」という色彩の観念を含むが、一方の */k/* は光の点滅から ‘shimmer’ の観念が生まれ、そこから「すばやい動き」の観念を含む語彙が派生している。

例えば、この語根から派生した「白樺」という語彙は、古代ヨーロッパの鬱蒼とした森の中で、「白樺」の木が古代ヨーロッパの人たちの目には白く輝いて見えたことにその名前が由来すると考えられる。事実、晩秋の Schwarzwald の森は、一面の Tannenbaum（もみの木）の中で、枯れかかった白樺がひとときわ輝いて白く見える。これこそがまさしく原風景ではないだろうか。また、現

代英語の *birch* の他に、古代教会スラブ語の *brěza* 「白樺」やラテン語の *farnus* や *fraxinus* 「トネリコ」、現代英語の *bright* も同根である。

4. 1. 3 *ghel- 'to shine'

この語根からは、現代英語の *gleam*, *glare*, *glow*, *gloaming* など「光」や「輝く」という観念を含む語彙が多く派生しているが、とりわけ「黄色」の観念を強く内包している語彙である。現代英語の /gl-/ は「光・輝き」の音表象を持っているが、今も昔も強い光が「黄色」に見えるという人間に共通の感覚がそこに感じられる。

この語根は、多くの enlargement を伴い様々な意味の派生語を作るが、特に現代英語では *yellow* 「黄色」や *gold* 「金」という語彙が派生している。

IE *ghel-wo- > Germanic *gelwaz > OE *gealu* > ModE *yellow*

IE *ghlo-ro- > gr *χλωρός* 'green, greenish yellow'

IE *ghl-to- > Germanic *gultham* > OE *gold*²⁰

「黄色い」というところから「胆汁」や「胆嚢」という語彙が派生しているが、ラテン語の「胆汁」を意味する *fel* は同根である。

IE *ghol-no- > Germanic *gallon-* 'bile' > OE *gealla* 'gall'

IE *ghel-n- > latin *fel* 'bile'²¹

ギリシャ語の *χλωρός* は「緑がかった黄色」または「薄い緑色」という意味で、そこから *chlorine* 「塩素」が出ているが、その色によって塩素はそう呼ばれた。*Chlorella* 「クロレラ」や *chlorophyll* 「葉緑素」も「緑色」がその語源であることはいままでもないが、ラテン語の *helvus* 「淡黄色の」や (*h*)*olus* 「青物、野菜」も同根で、古代の色彩感覚ではこの語根の守備範囲が「淡黄色」から「淡緑色」までかなり広がったことが推察される。

4. 1. 4 *bhel- 'to shine, flash, burn'

この語根から派生した様々な色彩を表す語を概観してみると、インド・ヨーロッパ語族の中の各語派の色彩感覚がかなり異なっていることに気づく。ロシア語では、*byelii* 'white' > *beluga* 「チョ

ウザメ」(現代英語では「白イルカ」の意もある)から、「輝く」「光る」「燃える」という観念が内包する色彩が「白」であることがうかがえる。

同じ語根から、ゲルマン祖語では IE **bhle-wo-* > Germ **blewaz* ‘blue’ のように現代英語の *blue* が派生している一方で、ラテン語では IE **bhlə-wo-* > L *flāvus* ‘golden, yellow’ や *fulvus* ‘赤黄色の, 褐色の」*furvus* ‘暗い, 黒い」という「赤・茶・黒」という語彙が派生している。

ゲルマン系では、ロシア語と同様に、

Germ **blaikjan* ‘to make white’ > OE *blācan* > ModE *bleach*

Germ **blaikaz* ‘shining, white’ > ON *bleikr*, OE *blāc* > ModE *bleak*

Germ **blas-* ‘shining, white’ > OE *blæse* ‘torch, bright fire’ > ModE *blaze*²²

などに見られるように「白」の観念も生じているが、これはゲルマン系民族の居住地が地理的に北の方であり、気候的にも寒く、青や白といった寒色系のイメージと深く結びついたものであると考えられる。これらはロシア語の「白」のイメージにも通じるものがあるが、冬の北ヨーロッパの太陽は「淡い」色で、地中海世界の「明るい」色彩感覚と対照をなすものである。

また、この語根は「火」の観念から、Germ **blisk-* ‘to shine, burn’ > OE *blyscan* ‘to glow red’ > ModE *blush* という発展が見られ、「赤」も内包している。さらに、IE **bhleg-* ‘to shine, flash, burn’ > Germ **blakaz* ‘burned’ > OE *blæc* > ModE *black* では、「火」>「焦げた」>「黒」という観念から「黒」のイメージも内包している。古英語では、*blāc* ‘bright’ と *blæc* ‘dark’ は母音の長さだけの違いで両極端の意味が対立しているが、この2つの語は同根である。

また、ラテン語では *fulgēre* ‘to flash, shine’ や *fulmen* (< **fulg-men*) ‘lightning, thunderbolt’, さらに *flagrāre* ‘to blaze’ や *flamma* ‘flame’ といった語彙が見られるが、前者の2つは「自然の光」、後者の2つは「火の光」である。ラテン語の「赤」は地中海の明るい色彩から、一方、ゲルマン系の「赤」は暗さ・寒さをしのぐための「火」のイメージが感じられる。

5. その他の色

5.1 印欧語根 **dheu-*

**dheus-o-* > Germanic **deuzam* ‘breathing creature, animal’ > OE *dēor* ‘animal’ > ModE *deer*

**dhwens-* > Germanic **duns-* ‘dust, meal’ > **duns-to-* > OE *dust* ‘dust’ > ModE *dust*; ON *duun* ‘bird’s down’
< fine like dust

**dhus-ko-* > Germanic **duskaz* > OE *dox* ‘twilight’ > ModE *dusk*; L *fuscus* ‘dark, darky’

**dheubh-* ‘beclouded in the senses’ > **dhoubh-o-* > Germanic **daubaz* > OE *deaf* ‘deaf’ > ModE *deaf*:

**dhu-m-bho-* > Germanic **dumbaz* > OE *dumb* ‘dumb’ > ModE *dumb*; Germanic **dubon-* > OE **-dufe* ‘dove’ < ‘dark-colored bird’ > ModE *dove*

本来は印欧祖語では、「埃・水蒸気・煙の立ち上る様」や「呼吸」や「色彩の形容詞」さらに「感覚器官などの障害」などを派生語の語根であった²³。

「息をするもの」から「生き物」へ、さらに英語で「動物一般」から「鹿」への意味の縮小が生じた。この語根は「埃や煙で薄暗い」という観念から *dusk* が生じ、古英語では「黒っぽい鳥」には *-dufe* という複合語を伴った語形成が見られ、これが現代英語で「鳩」を意味する *dove* になる。*Pigeon* がオノマトペ起源であるのと対照的である。

5.2 **kel-* ‘gray, black, dark’

印欧祖語の **kel-* ‘gray, black, dark’ はラテン語の *columbus* 「ハト」になるが、俗ラテン語 **columbra* を経て、古英語の *culfre*, さらに現代英語では *culver* ‘dove, pigeon’ という形で生き残っている。この語も「黒っぽい色」という色彩語が語源である。また、印欧語根の **pel-* ‘pale’ は、ゲルマン系では Germanic **falwaz* > OE *fealu*, *fealo* ‘reddish yellow’ > ModE *fallow* 「淡黄褐色の、こげ茶色の」という変化を遂げているが、ラテン語では *pallēre* ‘to be pale’ や *palumbēs* ‘ringdove’ (< ‘gray bird’) さらに IE **pel-ko-* > L *falcō* ‘falcon’ や IE **pele-wo-* > Gr *πελιός* ‘dark’, *πολιός* ‘gray’ という意味の発展も見られるように、*palumbēs* も *falcō* も「黒っぽい色の鳥」が語源である。しかし、Klein (1971:272) では、*falx* 「鎌」と同源で、その足が鉤爪で鎌のように曲がっている (*falcate* の語源) ためとしている。

このように鳥の名前はその色から付けられる場合が多いが、現代英語の *swan* 「白鳥」は印欧語根 **swen-* ‘to sound’ が語源で、古英語 *swan* > ModE *swan* という発展をしてきた。これは、ラテン語の *sonāre* ‘to sound’ と同根で鳴き声による命名である。また、ギリシャ語の *κυκνος* はラテン語の *cygnus* を経て現代フランス語の *cygne* に対応し、元々は擬音語起源である。一方、ロシア語の *lébed* ‘白い鳥」や古高地ドイツ語の *albiz* は明らかにその羽の白さから名付けられており、日本語の「白鳥」はまさにその典型である。

5.3 **Reudh-*

その色から名付けられるものは、動植物だけにとどまらず、チェコに発し、ドイツを貫流して北海に注ぐ「エルベ川」はラテン語の *albus* 「白い」に由来し、また紀元前49年カエサルの軍隊が元老院令を犯して、「さいは投げられた」と言って渡ったのがルビコン川で、その色は赤かったためにそう名付けられ、ラテン語の *rubeus*、現代英語 *red* と同根である。その *Rubicon* は印欧語根の **reudh-* までさかのぼることができ、この語根もまた様々な派生語の起源になっている。例えば、現代英語の *rowan* ‘mountain ash’ 「ナナカマド」もその花の種子の色に由来する名前である。また現代英語の *robust* 「丈夫な」はラテン語の *robustus* ‘as strong as an oak’ にさかのぼるが、オークの類は非常に硬質で、かつ、その色が赤っぽかったことにその名の由来がある。

植物以外では、現代英語の *rust* 「さび」もその色から名付けられており、同じく宝石の *ruby* もラテン語の *rubeus* が起源で、その色から名付けられている。

Le rouvre passant pour être le plus dur des bois, *robur* est devenu synonyme de << force, vigueur >>²⁴.

ラテン語の *robur* は、Ernout と Meillet のラテン語語源辞典にも << *chêne rouge* >> と定義されているように、ヨーロッパの森に群生する赤みがかったオーク類を「赤い」という語根を使って名前を付け、その特徴が非常に堅い材質だったため、二次的に「堅い・強い・丈夫」という観念が備わったと考えられている。

6. プナ科の樹木

6.1 *book* の語源

印欧祖語 **bhago-s* ‘beech’ からは、ラテン語の *fāgus* や現代英語の *beech* が派生しているが、ギリシャ語ではブナ科の落葉高木のブナが存在しなかったため、コナラ属の常緑高木を指す *φηρός* が派生している。現代英語の *book* は *beech* 「ブナ」が起源の語彙であるが、その経緯は、ルーン文字はブナの樹皮に刻み付けられたことから、書き付けが「書物」という意味に発展したというものである。本を表す語彙の語源は、ギリシャ語の *βιβλος* もラテン語の *liber* も *cōdex* もそれぞれ本来は文字を記すのに用いられたパピルス、樹の内皮、木材の板を意味する語彙がその語源になっている。

Liber: pellicule qui se trouve entre le bois et l'écorce extérieure, le *liber*, sur laquelle on écrivait avant la découverte du papyrus²⁵.

Le nom ancien s'est conservé, bien que le hêtre prospère en Italie seulement en montagne, à une assez grande altitude, l'arbre étant plutôt nordique. Le caractère religieux de l'arbre a pu aider à la conservation. Car ce n'est pas un accident que le mot subsiste aussi en Grèce, où l'arbre n'existe pas, et où *φάγος* a dû être appliqué à un autre arbre.

Fāgus et *φηγός* sont unis par l'idée commune d'arbre à fruits comestibles (faîne et gland)²⁶.

ブナはイタリアでは高地山間部にのみ見られるが、主にヨーロッパ北部に分布していた。ブナの木は、宗教的な側面での必要性から古代からの名前が受け継がれた。しかし、ギリシャにはブナの木が存在しなかったため、ギリシャ語では柏（またはナラの木）を指していた。ただラテン語の *fāgus* もギリシャ語の *φηγός* もブナの実とドングリ（ナラの実）のように実を付けるという点で大きな違いはないが、植物相や宗教などの要素が語彙の意味にも影響を及ぼすという言語外の事情で同根語が異なる種類の樹木を指しているのである。

6.2 ブナ科コナラ属

また、ラテン語の *aesculus* は現代英語の *oak* と同源で、ブナ科コナラ属の一種を指すが、*quercus* と *robur* と *ilex* と異なる樹木である。

ラテン語の *quercus* は印欧語根 **perkwu-* から派生し、オークの類を指す。語頭の *q-* は本来の *p-* が後ろの */k/* に同化したため、現代英語の *fir* 「モミ」（常緑針葉樹）と同根語で、常緑樹という点では共通している²⁷。

ラテン語の *robur* はフランス語で << *chêne rouge* >>, *ilex* は << *chêne vert* >> と定義されており、やはりその色によって微妙に区別されていることがわかる。

7. おわりに

印欧語族の言語の動植物の名称の起源にさかのぼってみると古代ヨーロッパの人たちの感性が見えてくる。その命名法は大きくわけて3つに分けられる。

先ずはじめはオノマトペ起源のものであるが、豚や牛などはその鳴き声から名付けられており、特に豚の鳴き声は、*/gr/* という音が印欧語全体にほぼ共通している。また、カエルの鳴き声は英語では *croak* という語彙で表されるが、ラテン語でもカラスなどの鳥の鳴き声は、概ね */k/* や */g/* という音で始まる語で表される。さらに、ハトを指す語彙も *pigeon* は擬音語起源であるのに対し、

dove は色彩の語彙がその起源である。

2つめは、擬態語による命名である。例えば、「ハリネズミ」や「ウニ」などは「トゲトゲ」というような意味を内包した印欧語根から派生している。また、ラテン系（フランス語の *grenouille*）では「カエル」はオノマトペ起源の語彙であるのに対し、ゲルマン系（英語の *frog*）は「ぴよんぴよん」跳ねる様子を擬態語で表した語彙が起源になっている。

3つめは、色彩が起源になっているケースである。「褐色」を意味する印欧語根 **bher-* からはゲルマン系では *bear*「熊」が派生している。また、「赤・黄・茶」という系統の色彩を示す語根 **el-* は、様々な動植物の名前の語源になっている。植物では、*alder*「ハンノキ」と *elder*「ニワトコ」、また *elm*「ニレ」も同根である。さらに動物では、*elk*「ヘラジカ」などがその例である。

現代英語の *birch*「白樺」も色彩語源であり、さらに *ruby* と *rust* も **reudh-*「赤い」という色彩を示す語根が起源であり、ラテン語の *robur*「カシ」も「赤い」が語源である。

【註】

1. Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English*, p.700
2. *ibid.* p.172
3. Ernout et Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, p.267
4. Bloch, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, p.304
5. Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I*, p.567
6. *The Loeb Classical Library, On the Latin language: V-75*, p.72
7. Watkins, *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, p.21
8. Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, p.1161
9. Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English*, p.359
10. Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, p.1267
11. Watkins, *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, p.22
12. Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English*, p.643
13. Watkins, *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, pp.16-17
14. *ibid.* p.7
15. Ernout et Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, p.38
16. Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I*, p.302
17. Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English*, p.22

18. *ibid.* p.408
19. Lehmann, *A Gothic Etymological Dictionary*, p.226
20. Watkins, *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, p.21
21. *ibid.*
22. *ibid.* p.6
23. *ibid.* p.14
24. Ernout et Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, p.575
25. *ibid.* p.354
26. *ibid.* p.213
27. *ibid.* p.555

【参考文献】

- Bailly, A. (1950) *Dictionnaire grec-français*, Hachette.
- Barnhart, R.K. (1988) *The Barnhart Dictionary of Etymology*, The H.W.Wilson Company.
- Bloch, O. and Von Wartburg, W. (1989) *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses universitaires de France.
- Bosworth, J and Toller, T.N. (1988) *An Anglo-Saxon Dictionary*, Oxford University Press.
- Chantraine, P. (1968-80) *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, Klincksieck.
- Ernout, A. and Meillet, A. (1985) *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Klincksieck.
- Ernout, A. and Meillet, A. (1974) *Morphologie historique du latin*, Klincksieck.
- Frisk.F. (1973) *Griechisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, Carl Winter.
- Gaffiot, F. (1934) *Dictionnaire latin-français*, Hachette.
- Gimbutas, M (1970) “Proto-Indo-European Culture: The Kurgan Culture during the Fifth, Fourth, and Third Millennia B.C.,” *Indo-European and Indo-Europeans*, University of Pennsylvania Press
- Glare, P.G.W. (1997) *Oxford Latin Dictionary*, Clarendon Press.
- Hoad, T.F. (1986) *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*, Clarendon Press.
- Klein, E. (1971) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, Elsevier.
- Kluge, F. and Seebold, W.E. (1995²³) *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, Walter de Gruyter.
- Lass, R. (1997) *Historical Linguistics and Language Change*, Cambridge University Press.

- Lehmann, W.P. (1970) "Linguistic Structure as Diacritic Evidence on Proto-Culture," *Indo-European and Indo-Europeans*, University of Pennsylvania Press.
- Lehmann, W.P. (1986) *A Gothic Etymological Dictionary*, E.J. Brill, Leiden.
- Lewis, C.T. and Short, C. (1933) *A Latin Dictionary*, Oxford at the Clarendon Press.
- Meillet, A. (1964) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, University of Alabama Press.
- Morita, S. (1999) "Sound Symbolism in Latin," *Lingua* Vol.20, pp.97-110, The Society of English Studies at Waseda Univ.
- Pokorny, J. (1989) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, Franke Verlag Bern und Stuttgart.
- Pollington, S. (1993) *Wordcraft*, Anglo-Saxon Books.
- Skeat, W.W. (1892) *Principles of English Etymology*, Vol.I-II, Oxford University Press.
- Tucker, T.G. (1931) *Etymological Dictionary of Latin*, Ares Publishers Inc.
- Watkins, C. (1985) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, Houghton Mifflin Company.
- Walde, A. and Hoffmann, J.B. (1982) *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter.